

on music box

ograph nobel

et harmonica

rald calendar

psweets hat

ap nut bell

bird perfum

ferryboa

小・密
川や
洋かな
子結
品





小川洋子
密やかな結晶

講談社

密やかな結晶

1994年1月25日 第1刷発行

著者 小川洋子

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

小川洋子^{おがわようこ}

1962年3月30日、岡山市に生まれる。早稲田大学文学部卒。1988年、

『海燕新人賞』を受賞。その後、『妊娠カレンダー』（文春文庫）により芥川賞受賞。

主要著書に、『完璧な病室』『冷めない紅茶』

『余白の愛』（ともに福武文庫）、『シユガータイム』（中央公論社刊）『アンジェリーナ』（角

川書店）等がある。

印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社
定価はカバーに表示してあります。

東京都文京区音羽二一二二／郵便番号一一二〇一
電話 文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五四

書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六二二
書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いたします。

© Yoko Ogawa 1994, Printed in Japan

密やかな結晶

書下ろし長篇小説

この島から最初に消え去ったものは何だったのだろうか、時々わたしは考える。

「あなたが生まれるずっと昔、ここにはもつといろいろなものがあふれていたのよ。透き通ったものや、いい匂いのするものや、ひらひらしたもののや、つやつやしたもの……。とにかく、あなたが思いもつかないような、素敵なものたちよ」

子供の頃、そんな物語を母はよく話して聞かせてくれた。

「でも悲しいことにこの島の人たちは、そういう素敵なものをいつまでも長く、心の中にとどめておくことができないの。島に住んでいる限り、心の中のものを順番に一つずつ、なくしていかなければならないの。たぶんもうすぐ、あなたにとっての最初の何かをなくす時が、やってくるはずよ」

「それは、怖いことなの？」

心配になって、わたしは母に尋ねたものだ。

「いいえ。大丈夫。痛くも苦しくもないからね。朝ベッドの中で目を開けたら、知らないうちにもう終わっているわ。じっと目を閉じて、耳をすませて、朝の空気の流れ方を感じ取ってごらんさい。どこかがきのうと違うはずよ。そうしたら、自分が何をなくしたのか、島から何が消え去ったのか、あなたにも分るわ」

母がこの物語をしてくれるのは、地下の仕事場にいる時だけだった。地下室は二十畳くらいの広さがあり、埃^{ほこり}っぽく、床がざらざらしていた。北側は川底に面していたので、水の音が聞こえた。わたしは自分専用の丸椅子に腰掛け、母はのみの刃を研^といだり、石をやすりで磨いたりしながら——彼女は彫刻家だった——静かな声で話した。

「消滅が起るとしばらくは、島はざわつくわ。みんな通りのあちらこちらに集まって、なくしてしまったものの思い出話をするの。懐しがつたり、寂しがつたり、慰め合ったり。もしもそれが形のあるものだったら、みんなで持ち寄って、燃やしたり、土に埋めたり、川に流したりもするの。でも、そんなちよつとしたざわめきも、二、三日でおさまるわ。みんなすぐにまた、元通りの毎日を取り戻すの。何をなくしたのかさえ、もう思い出せなくなるのよ」

それから母は手を休め、わたしを階段の裏側に連れてゆく。そこには小さな引き出しがたく

さん並んだ、古いタンスが置いてある。

「さあ、どれか一つ、好きな引き出しを開けてごらん」

引き出しについた、錆びた楕円形の把手とつてを一つ一つ眺めながら、どれがいいかわたしは長い時間考える。

わたしはいつも迷ってしまふ。中にしまっているものが、どんなに不思議で魅惑的な品物か、よく知っているからだ。今までに島から消え去ったものたちを、母は秘密のこの場所に隠しているのだ。

やっと決心して、一つの把手を引っ張ると、母は微笑みながら、中のものを掌にのせてくれる。

「これはね、母さんが七つの時に消えてしまった、“リボン”という名の布だよ。髪に飾った、洋服に縫いつけたりするの」

「これは“鈴”。手の上で転がしてごらん。ほら、いい音がするだろう」

「ああ、今日はいい引き出しを選んだね。母さんが一番大切にしている“エメラルド”だよ。おばあさんの形見なの。可憐で、貴重で、気品があつて、島では一番大切にされていた宝石だったのに、みんなもう、そんな美しさなんて忘れてしまった」

「これは小さくて薄っぺらだけど、大事なもののなんだよ。誰かに何か伝えたいことがある時

は、紙に書いて、この「切手」を貼^はりつける。そうすれば、どこへでも配達してくれたの。そんな時が、遠い昔にはあったんだよ」

リボン、鈴、エメラルド、切手……。母の口にする言葉はまるで、外国人の少女か新種の植物の名前のようで、わたしをぞくぞくさせた。母の話を聞きながら、それらがきちんと島に息づいていた頃のことを想像するのは楽しかった。

でもそれはまた、難しい想像でもあった。掌の上のものは、冬眠中の小動物のようにただじっとうずくまっているだけで、何のシグナルも送ってきけなかった。わたしはしばしば、宙に浮かんだ雲をつかんできて粘土細工^{ねんど}を作っているような、頼りない気分になった。秘密の引き出しの前では、母の言葉の一つ一つに、心を全部集中していなければならなかった。

わたしが一番好きなのは、「香水」についての物語だった。それは小さなガラスの瓶に入っていた、透明な液体だった。初めて母がその瓶を持たせてくれた時、わたしは砂糖水か何かと勘違いして、口をつけそうになった。

「ああ、飲むものじゃないよ」

と母は、あわてて笑いながら言った。

「こうしてね、一滴だけ首筋につけるの」

母はガラス瓶を耳の後ろに持っていき、大事そうにそろそろと、液体をたらした。

「何のためにそんなことをするの？」

わたしにはわけが分らなかった。

「香水は本当は目に見えないものなのよ。目に見えなくても、瓶に閉じ込めておくことができるの」

わたしは瓶の中身に目を凝らした。

「香水を身体につけると、いい匂いがするの。誰かをうつとりした気分させることができるの。母さんが娘の頃は、みんなデートの前には香水をつけたものよ。好きな男の子に気に入ってもらえる匂いを選ぶのは、洋服を選ぶのと同じくらい大切なことだったの。これは父さんとデートする時にいつもつけていた香水。父さんとはよく、南の丘の斜面にあるバラ園で待ち合わせをしたから、バラの匂いに負けないものを探すのが大変だったわ。風が吹いて母さんの髪がなびいたら、さっと横目で父さんの方を見たわ。ちゃんとわたしの匂いをかいでくれたかしら、ってね」

香水の話をする時が、母も一番生き生きとしている。

「あの頃はみんな、いい匂いを感じることができたの。それを素敵だと思ふことができたの。それなのに、今ではもう駄目。どこにも香水なんて売ってない。誰もそんなものを欲しがらない。香水が消えてしまったのは、父さんと結婚した年の秋だった。みんな自分の香水を持って

川のほとりに集まったわ。瓶の蓋を開けて、中身を川に流したの。最後、名残惜しそうに瓶を鼻に近づけている人も何人かいたわ。でももう、その香りを感じ取れる人は誰もいなかった。香水にまつわる思い出も、全部消えてなくなっていた。それは役立たずの、ただの水に成り下がってしまったの。それから二、三日、川はむせるほどに匂ったわ。魚もいくらか死んだ。でも氣に止める人はいなかった。だってみんな、心の中から香りをなくしてしまっただけですもの」

最後に母は淋しそうな目をした。そしてわたしを膝に抱き寄せ、首筋の香水をかがせてくれる。

「どう？」

母は聞く。わたしはどう答えていいか困ってしまう。確かにそこには、何かの匂いがあった。パンが焼ける時とも、プールの消毒槽にかかる時とも違う、何かの氣配が漂っていた。でも、どんなにがんばっても、それ以上の思いは浮かんでこない。

わたしがいつまでも黙っていると、母はあきらめて小さなため息をつく。

「いいのよ。あなたにとっては、これはただの、少量の水でしかないのよね。仕方ないことだわ。なくしてしまったものを思い出すのは、この島ではとても難しいことだから」

そう言って母は、ガラス瓶を元の引き出しにしまう。

地下室の柱時計が九時の合図を鳴らすと、わたしはもう子供部屋に戻って眠らなければいけない。母はのみとハンマーを持って仕事に取り掛かる。明かりとりの窓に、三日月が浮かんでいる。

おやすみなさいのキスをする時、わたしはずっと尋ねたいと思っていたことを、ようやく口にする事ができる。

「どうして母さんは、消え去ったものを、そんなによく覚えているの？ みんなが忘れてしまった香水の匂いを、どうして今でもかぐことができるの？」

母はしばらく窓の向こうの三日月に目をやり、それからエプロンに飛び散った石の粉を指先で払う。

「母さんもいつも、そのことについて考えるわ」

声が少しかすれている。

「でも分らないの。どうして母さんだけが、何もなくなさないのか。いつまでもいつまでも、すべてを覚えているのか……」

まるでそれが不幸なことでもあるかのように、母は目を伏せる。わたしは彼女を慰めるために、もう一度おやすみのキスをする。

母が死んで、その後にも父も死んで、それからずっとわたしは一人でこの家に住んでいる。赤ん坊の頃から面倒を見てくれていたばあやさんも、おとしし心臓の発作で亡くなってしまうた。

北の山を越えた水源地の近くの村に、いとこが何人か住んでいるらしいが、一度も会ったこととはない。北の山は刺のある木がたくさんはえていて、頂上にはいつも霧がかかっているの
で、山の奥へ足を踏み入れる人はほとんどいない。そのうえ島には地図というものがないの
で——たぶんもうずっと昔に消えてしまったのだろう——山の向こうがどうなっているのか、
本当は島がどんな形をしているのか、誰も知らないのだった。

父は野鳥の研究者だった。南の丘の頂上にある、野鳥観測所に勤めていた。一年のうち三分

のくらはいは観測所に泊まり込んで、データを取ったり、写真を写したり、卵を孵化^{ふか}させたりしていた。

お弁当を届ける口実で、わたしはしょっちゅうそこへ遊びに行った。若い研究員たちはみんなわたしを可愛^{あい}がってくれ、ビスケットやココアをごちそうしてくれた。

わたしは父の膝の上ののって双眼鏡をのぞいた。くちばしの形や、目の縁の色や、羽の広げ方や、とにかく父はどんな小さな特徴も見逃さず、鳥の名前を言い当てることができた。双眼鏡は子供のわたしには重すぎて、すぐに腕が痺れてきた。すると父は左手で、軽々とそれを支えてくれた。

そんなふうに二人で顔を寄せ合って鳥を眺めている時、わたしはふとあのことを父に聞いてみたくなることがあった。

「母さんの仕事場の、古いタンスの引き出しに、何が隠してあるか知っている？」

でも、いざ聞こうとすると、明かりとりの窓から三日月を見ていた母の横顔が浮かんできで、どうしても声にすることができなかった。

「お弁当はいたまないうちに、早めに食べてね」

代わりに口から出てくるのは、そんな他愛もない母からの伝言だった。

帰りはバス通りまで父が送ってくれた。途中にある餌場^{えさば}では、お土産にもらったビスケット

の一枚を粉にしてまいた。

「今度はいつ家に帰ってこられる？」

わたしは尋ねる。

「土曜日の夕方かな、たぶん……」

もそもそと父は答える。

「それじゃあ、母さんよろしくな」

作業服の胸ポケットにつめた、赤鉛筆やコンパスや蛍光ペンや定規やピンセットが、こぼれ落ちそうなくらい大きく、父は手を振るのだった。

鳥たちが消えてしまったのが、父の死んだあとで本当によかったと、わたしは思う。鳥の私たちはおおむね、何かの消滅にもなつて職を失つても、たいした混乱もなくすぐに新しい仕事をみつけることができるようだけれど、父の場合はそうはいかなかっただろう。父は鳥の名前を言い当てる以外、他にとりえのなかった人だ。

向かいのおじさんは帽子職人から、傘職人になった。ばあやさんのご主人はフェリーの整備士から倉庫番になった。クラスメイトのお姉さんは美容師から助産婦になった。誰も文句を言う人はいなかった。たとえお給料が減つたとしても、前の職業をうらやんだり懐かしがったり

はしなかった。それに、いつまでもぐずぐずしていると、秘密警察に目をつけられる恐れがあった。

わたしを含めて、みんな実に簡単にいろいろなことを忘れることができる。まるでここは、広がってゆく空白の海の上でしか、浮かんでいることのできない島のようなのだ。

鳥の消滅も他のケースと同じように、ある朝突然に起こった。

ベッドの中で目を開けた時、空気の張りに微かなざらつきがあった。消滅のサインだ。わたしは毛布にくるまったまま、注意深く部屋を見回した。鏡台の化粧品、机の上に散らばったクリップやメモ用紙、カーテンのレース模様、レコード棚……どんなにささいなものにも可能性はあった。何が消え去ったかを探すには、辛抱強い神経の集中が必要だった。

わたしはベッドから降り、カーディガンをはおって庭に出てみた。近所の人たちもみな外へ出て、不安そうな表情であたりをうかがっていた。隣の家の犬が、低い声で鳴いていた。

その時、茶色の小鳥が一羽、空の高いところを飛んでいるのが見えた。丸みを帯びた輪郭で、お腹に少し白い毛が混じっているようだった。

「あれは、観測所で父さんと一緒に見たことのある鳥だったかしら」

そう思った瞬間、わたしは心の中の、鳥に関わりのあるものすべてを失っていることに気づいた。鳥という言葉の意味も、鳥に対する感情も、鳥にまつわる記憶も、とにかくすべてを。

「今回は、鳥だったなあ」

向かいの元帽子職人のおじさんが、ぼつりと言った。

「鳥だったらいいよ。それほど不自由な思いをする人もいないだろうから。鳥は勝手に、空を飛ぶだけさ」

おじさんは首のマフラーを締め直し、小さなくしゃみをした。わたしと目が合うと、父が野鳥の研究者だったことを思い出したのか、気まずそうな微笑みを浮かべてそそくさと仕事に出掛けて行った。

他の人たちも、消滅の正体をはっきりしたことで、安心した様子だった。それぞれ、朝の用事に取り掛かろうとしていた。わたしだけがいつまでも空を眺めていた。

さっきの茶色い小鳥は一つ大きな円を描いたあと、北の方角へ遠ざかっていった。何という種類の鳥か、思い出すことはできなかった。観測所で父さんと双眼鏡をのぞいている時、もっとまじめに名前を覚えておけばよかったと、わたしは後悔した。

せめてその羽ばたき方や、さえずりや、色の具合いを、自分の中にとどめておこうとしたが、無駄だった。父さんとの思い出に満ちているはずの鳥が、もはや何の温かい感情も呼び起こしてはくれなかった。それは羽を上下させることで宙に浮いている、ただの生き物にすぎなかった。